中世・草戸千軒探検⑬

～暖(あたた)める～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を紹介しています。

前回は「灯す」のコーナーに展示した資料によって、火と灯りとの関係を探ってみました。今回は火のもう一つの役割である「暖める」機能について、「暖める」のコーナーの資料から紹介します。

遺跡から出土したさまざまな形の瓦器火鉢

吉田兼好が『徒然草(つれづれぐさ)』の中で「家のつくりようは夏を旨(むね)とすべし」と述べているように、日本の伝統的な住宅は冬の寒さよりも、夏の暑さをしのぐことが重視されたと言われています。現代のようなエアコンのない時代には、火を焚いたり、衣服を着込むことで寒さは何とか防ぐことができますが、夏の暑さと湿気には悩まされたに違いありません。中世の人々は、決して寒さが平気だったわけではなく、暖房器具によってしのぐことができたということでしょう。

それを示すように、草戸千軒町遺跡からはいくつかの暖房器具が出土しています。最も目立つのが、瓦器(がき)の火鉢(ひばち)です。瓦器とは、屋根に葺く瓦と同様に、製品の表面に炭素を吸着させて黒灰色にした土器です。炭素の吸着によって、釉薬をかけなくても、製品の耐久性をある程度高めることができたと考えられています。

瓦器の火鉢としては、奈良・興福寺の庇護(ひご)を受けた「火鉢座」に属する職人たちの生産した「奈良火鉢」が、近畿地方を中心に販路を広げていたことが知られています。草戸千軒町遺跡からも奈良火鉢の可能性がある製品も出土していますが、のちには各地で奈良火鉢をまねた製品が生産されていくようです。

また、家の中に作られた「囲炉裏(いろり)」も、重要な暖房器具です。囲炉裏の火は暖房だけではなく、煮炊きのためにも使われており、人々の生活に不可欠なものでした。

（主任学芸員　鈴木康之）

足駄作りの家に再現した囲炉裏